



連載

常陸時代の佐竹氏 — 500年の軌跡を追う —

「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第1回】

今、なぜ佐竹氏なのか

巨大堀跡の出土

茨城県北部の都市、常陸太田市。同市の発展は通称「鯨ヶ岡」と呼ばれる台地を中心に発展してきた。現在は、主に台地を下った国道349号までの平坦地に新市街地が形成されている。

令和2年（2020）10月、私は旧市街地となった鯨ヶ岡の台地で同市教育委員会が実施した発掘調査を見るため現地を訪れた。調査地は同市栄町の一角。地表に出現した太田城の堀跡はなんと5条（五つ）もあった。

「おー、すごい」とため息が漏れた。調査区域は、戦国大名佐竹氏の本城跡の3郭（三の丸）付近である。

出土遺構の中にほぼ直角に3回曲っている巨大な堀跡があった。同市教育委員会の『「太田城跡」JT跡地内太田城跡埋蔵文化財調査報告書—令和4年3月発行』によると、総延長は175^m。堀幅約8.2^m、堀底0.2~0.1^m、深さ4.8^m以上、傾斜角約45度。典型的な薬研堀である。現地説明の様子を伝える『茨城新聞』（同年11月6日付）の記事で教育委員会の説明者は「戦国大名佐竹氏のすごさを感じてもらえたのでは」と述べている。遺物は古瀬戸のほか貿易磁器の染付皿破片などが出土。遺構と併せ佐竹氏本城の威容をうかがわせる「物証」である。

調査区域は、日本たばこ産業（株）（略称「JT」）から平成29（2017）年9月、同市に寄付（無償譲渡）された土地で、面積は約1.8^{ha}。寄付を受け同市は、「定住人口の拡大のための受け皿として良好な住宅用地として活用したい」（『平成30年第1回定例会議だより』—平成30年5月25日発行）としていた。一方、当該地は文化財保護法に基づく「埋蔵文化財包蔵地（城跡）」であったことから、「JT跡地利用に伴う事前調査」として発掘調査を実施したところ、大規模な遺構が出現したのである。出土した遺構は令和2年11月末までにすべて埋め戻されたが、『同報告書』には、

「当市では、総合計画のひとつの柱としまして『地域資源に磨きをかけた観光の振興』を掲げております。地域に埋もれた資源を発見し、その資源について学び、活用することが地域の活性化に結びついていくものと考えております」との記述があり、ぜひそのような形で保存と活用が図られることを願うばかりである。

身近な中世

堀跡は、出土遺物の年代から16世紀の佐竹氏本城3・4郭跡の一部と考えられている。発掘によって出土した堀跡が「巨大」とか「威容」とか形容されても多くの県民にとって「佐竹氏っていつの時代の人？」とピンとこないかもしれない。『戦国佐竹氏研究の最前線』（2021年、山川出版発行）の編者の一人、佐々木倫朗氏は「一般の方々に佐竹氏と聞いてすぐに思い浮かぶ人物がでてこない」と本の中で述べている。「奥七郡」（茨城県北部）から大々名となった佐竹氏があまり知られていない現状をうかがわせる一文である。

県外を旅して「茨城県からきた」というと、水戸黄門（徳川光圀）が話題にでる。水戸藩は江戸時代、常陸国内にあった藩の一つである。ところが他県からみると、茨城県イコール水戸藩とみられがちだ。土浦藩や笠間藩、下館藩など常陸国内にあった多くの藩の存在はかすんでいる。まして、佐竹氏は江戸時代以前の領主である。茨城県の近世諸藩ですらあまり知られていないとなると、その前の時代、「中世」の佐竹氏はなおさらかもしれない。しかし、本当に中世は遠い世界なのだろうか。

中世の時代区分は、平安時代後期（11世紀後半）から鎌倉・室町時代、織田・豊臣時代を経て戦国時代（16世紀）にいたる約500年間である。これらの時代には教科書などで目にし、耳にした人物が数多くいる。平安時代後期なら「源義家」や平泉の「藤原清衡」。鎌倉時代なら「源頼朝」や「北条時宗」。室町時代なら「楠正成」とか

あしかがたかうじ
「足利尊氏」。織豊時代はその名の通り「織田信長」、「豊臣秀吉」。いずれも歴史上、よく知られた人物だ。

戦国時代は越後国（新潟県）の上杉謙信けんしんや甲斐国（山梨県）の武田信玄しんげん。出羽国（山形県）・陸奥国（宮城県）の伊達政宗だてまさむね。江戸幕府を開いた徳川家康いえやす。さらに石田三成みつなりもいる。このように中世には歴史上、よく知られた「身近な人物」であふれている。佐竹氏もこれらの人々と共に平安時代後期から戦国時代まで常陸国で活動してきた。その結果、豊臣時代、常陸国を統一し、54万5800石の大々名となった。

「一所懸命」

佐竹氏は初代まさよしの昌義から数え20代よしのぶの義宣まで約500年にわたって常陸国に居留した。家祖とされる人物は、昌義の祖父、源義光である。義光は平安時代後期の源義家の弟である。有名な兄の影に隠れて目立たないが、義光の長男義業よしなりの子が佐竹氏初代、義光の二男義清よしまよが甲斐国の武田氏の祖となった。従って佐竹氏と武田氏は、先祖が兄弟である。武田氏からは戦国時代、上杉謙信と川中島で戦った武田信玄がいる。甲斐といえば武田信玄、そのくらい有名である。

一方の佐竹氏はというと、地味である。とはいえ、作家の司馬遼太郎氏は『街道をゆく』（司馬遼太郎全集第60巻、平成11年、榊文芸春秋発行）でこう述べている。「江戸期、270余の大名がいたが、ほとんどが戦国期の成り上がりで、源頼朝以来の大名といえば薩摩の島津氏と佐竹氏しかない。佐竹氏は長く常陸国（いまの茨城県の大部

分）にいた。すでに平家政権のころに大きな力をもっていたから、頼朝以来という島津氏より古い。まして徳川氏などは、物の数ではなかった」と。

また、こうも言っている。「佐竹氏は歴史の激動期ごとにうまく立ちまわったのだろうと想像していいわけだが、それが逆で、およそ不器用だった」（『街道をゆく』）。確かに華やかさはない。しかし、周辺の領主や武将から「助けて」と頼まれると、その盟主として戦い、奥州の伊達政宗や小田原の北条氏の進出を防いだ。豊臣秀吉に納めた金の運上金（租税の一種）は上杉・伊達氏に次いで全国3番目の多さだった。経済力をバックに寺や神社も建立した。それらの建築物や仏像彫刻は茨城県の文化遺産として今日に伝わっている。

常陸国で500年の歴史を繋いだ佐竹氏は、100年に及ぶ内乱を克服し、一族と家臣団を維持し、領地を守ってきた。まさに「一所懸命」にである。佐竹氏が出羽国（秋田県）に国替となった後、常陸国に残り、土着した家臣たちは代々、家族と土地を守り、ふるさとを繋いできた。

しかし現在、地方の疲弊は色濃くなっている。そうした中、何世代にもわたって地域と人々を繋いできた佐竹氏の軌跡は、今、何を語ってくれるのか。私たちが置き忘れてしまったものがあるとすれば、それは何なのか。この連載を通して探してみたい。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



JT跡地の太田城址3郭
付近から出土した堀跡
—常陸太田市栄町
(令和2年10月筆者撮影)